

熊ノ郷 淳氏 に聞く

世界初の発見

堀井 この度は大阪科学賞を受賞され、誠におめでとうございます。

熊ノ郷 ありがとうございます。

堀井 今年はノーベル賞に日本人が二人も選ばれ、あらためて日本の科学技術力の高さが注目されています。大阪科学賞も同様に、これまで世界に名だたる研究者の方々が受賞されていますね。

熊ノ郷 私の師匠で第1回大阪科学賞(1983年)を受賞した岸本忠三教授(現・千里ライフサイエンス振興財団理事長)は、IL-6(インターロイキン)という免疫

ました。また、抗体のクラススイッチで高名な本庶佑(ほんじょたすく)教授(1984年受賞)も、私が入学する以前ですが、阪大の教授をされていました。このように世界に誇る日本の免疫学研究は、大阪大学が牽引してきたものです。私が免疫学研究の道に進んだのも、そうした世界トップの方々の刺激を受けたからです。

堀井 2007年には山中伸弥教授(京都大学iPS細胞研究所長)も大阪科学賞を受賞されています。そうしたお歴々に続いて受賞された熊ノ郷先生は、どのような思いでこの賞をお受けになりましたか。

熊ノ郷 日本の科学の発展に貢献され、



実験室にて

細胞の情報伝達分子を解明した功績で、2009年にスウェーデン王立アカデミーからクラフォード賞を授与されました。また審良静男(あきらしずお)教授(2002年受賞)も自然免疫の研究で毎年ノーベル賞候補に上げられています。さらに、肝炎治療などで用いられるインターフェロンの研究で高名な谷口維昭教授は現在東京大学におられますが、大阪科学賞を受賞された当時(1989年)は大阪大学におられ

現在も世界をリードされている方々が受賞された大阪科学賞をいただけたことは、本当に光栄に思います。同時に「これからも頑張れよ」と言われているようで、とても励みになっています。

堀井 そうですか。このたびの受賞対象となったセマフォリンによる免疫制御のご研究とはどのようなものか、ご説明いただけますでしょうか。

熊ノ郷 まず、母親の胎内で生命が発